て銚子測候所の本臺宛の月表の記事欄を見るに發現は午後七時頃であつた。光芒を測定せしに仰角は五十度であつて五十分後には消失してしまつたと。芒端の五十度に達するのは可成り高い方であらう。次に大正十二年十二月十九日の曉方頃新居濱で觀測した黃道光に就いて同所より本臺宛の氣象月表中の記事欄のを摘記する。「光芒の形狀—黃道に沿ひ地平線の所にて約 20 度の幅の圓錐形狀にして南方に傾き地平線と約 25 度の角度をなし先端は高度 35 度の所にある星々乙女座? 星附近に達する。色は白色にして銀河の最明部よりは薄弱なりき。而して東方一帶に一片の雲翳を認めず天氣は快晴なりき」と云ふ。

(大正十四年十二月一日中央氣象臺に於て)

室 戸 の 蟬

大 保 珊

Phenological Observation of Cicada near Muroto.

By T. amaki. DAIHO.

氣象集誌第二輯第三卷第十號松山金次郎氏論文蟬の初鳴の季節を讀みて此處に室戸の蟬を公に致し度いと存じます。松山氏の説述せられし通り氣象雜纂第三卷第二冊所載の大正十二年動物季節中の蟬の部に於て室戸及び足摺のみは他所よりは特に早く、四月初旬に蟬の初聲を聞きたる事になつてゐるが、之は室戸のものは松山氏の御意見の通り『まつむし』即ち『はるぜみ』に他ならず。突岬の故を以ての特別現象にてはないのです。足摺の方も大方室戸のものと同種類であると信じます。氣象雜纂中に單に蟬として表示しあるも其中には種々の種類を含有してゐることと思ふ。

室戸に於ては大正十一年は四月十七日に、大正十二年は四月九日に蟬『ひぐらし』として初聲を聞いてゐる様になつてゐるが、之はやはり『はるぜみ』の誤りだらうと思ふ。大正十三年私が聞いたのは不幸にして此の『はるぜみ』を記入漏してゐるが『ちーちー』が七月七日『くまぜみ』が七月二十九日と記入してゐる。大正十四年は『まつせみ』として即ち『はるぜみ』四月二十五日初聲と記入した。

以上からして此の突岬も他所に對してあまり特種な現象ではないと思つてゐる只今迄の經驗では此の地に現はるゝ蟬の種類は『はるぜみ』『ちーちー(にいにい?)』『つくづく』『かなかな』『くまぜみ』ぐらゐであると思はれる。而して其れらも『はるぜみ』及び『つくづくばーし』を最多として『ちーちー』之に次ぎ『かなかな』

は其數甚だ少い様に感ぜられる。『くまぜみ』に至りては當所附近にて殆んど聞かぬぐらゐるにて山下の里にて極少數の聲を聞いた。

次に私の上に述べた『ちーちー』なるものは松山氏提出の『ちつち』であらうかと思つて見た。體長は良く似てゐるが『にいにい』にも良く似てゐる。聲はどちらとも似て居るし色は寧ろ『ちつち』だらうかとも疑はれるし實は一寸斷定し兼ねるがやつぱり『にいにい』の方であらうか？どうも分布やら出現期等を見るとさうらしい。何となれば第一『ちつち』は九州方面には現れない様に書いてあるが、私の『ちーちー』は何も當地獨特のものでもなければ九州の中央で飽く程見たり聞いたり取つたりした事があるのだから、而してどこでゞも大抵見受ける極めて廣範のものと思はれる。第二は『ちつち』の出現期である。表を拜見すると八九月となつてゐるので他種に比して一番遅いかに感ぜさせられます。私の『ちいちい』は當所でも九州熊本あたりでゞももつと早く否却つて他種よりは早いと思つてゐる。幼少の頃ほひ『ちーちー』と聞き人も然か教へてくれたので『にいにい』とは聞きにくく思はれるけれど『ちつち』にしては以上の點でをかしくなる。で此點をもつと詳しく御區別を願ふなり或は御教導を仰ぐ爲に聊か私の『ちいちい』を單に經驗と感じとから御説明申上ます。之等について何等の系統的な知識も有せず又特に専門的に取調べた事もないのですから。即ち私の知る限りでは四五月頃の春に先づ山奥の方から『まつむし』のジイジイワジイワの聲が流れ出します。次に梅雨も過ぎて段々暑氣を加へると『ちーちー』が里の路傍に初夏を告げる聲は割合細くて憐感を覺ゆる。暑氣益々甚しくなると彼の大きやかなる『くまぜみ』の全盛を極めて體全部振り上げて雨の降る様に鳴きしきる。そして夕立の將に來らんとする時や夕べの頃や夏も過ぎ行かんとし秋風間近にもならば『つくづくぼーし』の彼方の岡でしきりと鳴いて或悲哀を通告するかの様に思つて來ました。此の『ちいちい』はやつぱり『にいにい』であらう。さはれ之等の蟬の出現は氣候や土地の異變にも依り同じからざる事勿論なれど、感じの儘の愚見を述べると共に大正十二年の室戸の蟬は私自身の觀測には非ざれども松山氏の御推察通り夏蟬に非ずして『まつぜみ』即ち『はるぜみ』に異ひない事を御紹介致度と思ひます。(大正十四年一月二十二日)